

雄氣堂々(上) 城山三郎



氣堂々(上)

城山三郎

新潮社版

雄気堂々 (上)

昭和四十七年八月三十日発行
昭和四十七年十月三十日三刷

定価六〇〇円

著者 城山三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 (261) 一一二(代)
振替 東京八〇八

印刷所 株式会社金羊社
製本所 新宿加藤製本所
落丁本はお取替えいたします

雄
氣
堂
々

(上)

目
次

変節	凶報	逃げる	横浜焼打ち	父と子	紙一重	四角四面	祝言	序曲 流産祝
----	----	-----	-------	-----	-----	------	----	--------

144	126	116	90	78	60	36	16	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	---

不発の罪

二人の英雄

心残りの事

仕事をつくる

一転また一転

別天地

脱走の勇者

宝台院の夕暮

若き神々たち

323 299 284 265 239 213 196 174 161

装幀 関野 準一郎

雄
氣
堂
々

(上)

序曲 流産祝

あまり人目にはつかないが、日本橋常盤橋公園をはじめ東京のどまん中に、いくつかの銅像となつて残っている人物がある。渋沢栄一である。

自分で金を出すようにして銅像をつくらせる人もある世なので、銅像即えらい人という気はないが、それでも一昔前までは、銅像が社会の人物評価のひとつの目安であつたとはいえよう。もともと、渋沢栄一自身は、銅像をつくるという話が出ることに、まるい顔をしかめた。

「また雨ざらしにされるのは、ごめんだね」

いかにも御本人が生きながら風雨にさらされるといった感じであつた。

古い像には、「子爵・渋沢栄一」とある。爵位もまた一昔前までの人物評価の尺度と考えると、三井、岩崎（三菱）、住友、古河、大倉など、大財閥の一族でも男爵どまりの中で、経済人でたつたひとり、子爵にぬきん出たのが、渋沢であつた。

設立し関係した企業五百、同じく関係した公共・社会事業六百といわれ、近代日本の無数の礎石を築いた人といえる。

「雨ざらしはごめんだ」の意を体してか、丸の内かいわいの渋沢像のいくつかは、屋内に在る。

帝国劇場正面玄関に在った大理石像。これは、渋沢の古稀こきを祝ってつくられたものだが、明るいふんい気の好きな渋沢は、除幕式には、きげんよく出席した。

各界の名士が行儀よく居並ぶ中で、主催者の福沢桃介があいさつした。

「……渋沢先生は福德円満なお顔立ちだが、必ずしも美男ではない」

といったとき、

「ノー、ノー！」

と、大声で叫んだ男があった。当の渋沢栄一である。満場爆笑した。

桃介は苦笑しながら、渋沢に目礼して続けた。

「先生は気が若い。いまそのようにつけ足そうと思っていたところで……。こうして胸像にしてみますと、たしかに美男と申せましょう」

まる顔に太い鼻っ柱。下り目の眉まゆ。柔和な眼は、右がやや小さい。そして右の口もとに、ガンを手術したくぼみがある。

小肥りで上半身はがっしりしているが、足が短い。そのせいか、この自称「美男」は、ほとんど胸像ばかり残している。

胸像のひとつは、皇居前の赤煉瓦れんがづくりの美しい建物、日本の金融資本の中核ともいうべき銀行集会所二階ロビーに安置されている。最晩年の姿らしく、これはまことに福德円満。翁おきなか嫗おんなかわからぬ顔、大黒さまを思わせる表情をしている。

そういえば、渋沢には「明けの大黒」というあだ名があった。

勝負ごとが好き。それも、いつもねばり勝ちである。徹夜して、みんながくたびれ、頭がもうろうとした夜明けごろになって力を発揮し、にこにこしながら、まき上げる。「明けの大黒」と

いわれたゆえんである。

若いころは、一週間ぶっ続けで花札もやった。幕末、最初に洋行するときに着た中古の燕尾服は、賭碁で手に入れたものであった。

この「明けの大黒」ぶりは、七十歳を過ぎても変らなかつた。

四男である渋沢秀雄氏の回想によると、夜十時ごろ帰宅する渋沢は、孫ほどと歳のちがう息子が学生仲間とトランプをやっているところへ、笑顔でやってくる。

「なかなか御精が出ますな」

などといって坐りこむ。そのうちに、ポーカーなどおぼえて、仲間に加わった。金のやりとりをするわけでなく、記録の上での勝負だが、それでも熱を入れる。

夜ふけて十二時過ぎ、

「きりのよいところで、そろそろおやすみになりませんか」

と、兼子夫人（後妻）が顔を見せる。

「はい、はい、もうすぐおしまいだよ。構わんから、先におやすみなさい」

と、老子爵はうわのそらの返事。

一時、二時、三時……最初は老人の体を案じていた学生たちが、しだいに形勢が怪しくなる。

逆に、老人は上り調子。

「まことに何ともはや御愁傷のいたりで……」

などと、にこにこ顔。夜がしらむ。老いたる「明けの大黒」のひとり相撲になってくる。

夜が明けきって、渋沢ははじめて我に返る。七時ごろには、もう訪問客がつかけてくるのだ。

「さあ、さあ、さあ、さあ」

自分を叱りつけるようにして立上り、畳廊下にスリッパの音を立てて洗面台にいそぎ、羽織を着ると、そのまま客との応接に移って行く。

後には兼子夫人も花札をおぼえ、親子で徹夜して花札をたのしんだりした。

渋沢は、晩年まで精力的であった。老いることを知らないし、老いる気もない。一度、百何歳とかの老僧が居るときいて、大倉喜八郎と二人で招いて健康法をきくことにした。

ところが、講義にきた老僧は、二人の受講生が結構、高齢なのにおどろいた。ために三人の年齢を合計してみようということになったが、数が多過ぎて暗算ができない。ソロバンを持って来させて、ようやく二百七十七歳と答えたこともあった。

渋沢自身も百歳まで生きるつもりであった。

ある日、服部時計店の服部金太郎が将棋をさしているところへ、渋沢がにこにこしてやってきた。

「いまイタリヤの骨相学者に人相を見てもらいましたら、わたしは百七つまで生きるそうです」
服部は将棋の駒を投げ出して、立上った。

「そりゃたいへんだ。渋沢さんに百七つまで生きられちゃ、これからどれだけ寄付金の御用があるかわからない。将棋どころじゃありません。もっとかせがなくちゃ」

成功は社会のおかげ。成功者は社会に恩返しすべきだというのが、渋沢のをぼくだが強い信念であった。社会事業などには必ず応分の寄付をするともに、世の成功者たちに呼びかけて寄付させるのも、渋沢が三十代からはじめて一生を貫いた仕事であった。

四男秀雄氏の伝える渋沢の言葉。

「金は働きのカスだ。機械を運転しているとカスがたまるように、人間もよく働いていれば、金
がたまる」

「わたしが、もし一身一家の富むことばかり考えたら、三井や岩崎にも負けなかったろうよ。こ
れは負けおしみではないぞ」

渋沢にはそれだけの能力があった。「負けおしみ」ではないことは、渋沢の事業歴が示してい
る。

常盤橋公園の渋沢像は、渋沢の案じた通り、雨ざらしになっているひとつである。

そこは大銀行やデパートをまわりに城壁のようにめぐらした都心の要^{かなめ}の地である。日本銀行を
ふくめ、それら大銀行や大会社の多くは、何らかの形で生前の渋沢に関係があった。

日本銀行は総裁に迎えようとしたが、渋沢ははねつけた。大蔵大臣になることも、渋沢はこと
わった。井上馨^{かおる}が総理になろうとするときであった。明治の元勳たちの中で、井上ひとりはまだ
総理になっていなかった。伊藤博文、山県有朋、松方正義らは、ぜひ井上内閣を発足させようと
したが、井上は、

「渋沢が大蔵大臣にならなければ、引受けぬ」

といった。元老や重臣たちは、入れ代り渋沢説得にのり出した。「きみがやれば、井上も総理
になれるのだから」と。

だが、当時、第一銀行頭取だった渋沢は、この話をことわり続けた。理由は簡単であった。
「わたしは実業家で通ず決心です」と。

かつて若くして大蔵次官を目前にする地位に進みながら、官尊民卑^{はんげんひょう}に反撥^{はんぱつ}して野に下った渋沢
であった。二度と政界官界へ足を入れぬと、自ら誓っていた。

渋沢の拒絶にあい、井上は組閣をあきらめ、ついに井上内閣は日の目を見ることはなかった。だからといって、井上は渋沢をうらみはしなかった。

「もし失敗して退くようだと、末路に傷がつく。きみが引受けてくれなかったおかげで、その心配がなくなつた」

これも負けおしみではなかったようで、井上はわざわざ渋沢を呼び、内閣流産祝の宴をはったのであった。

雨ざらしの像の中、渋沢に生きうつしという銅像は、飛鳥山あすかやまの旧渋沢邸跡に在る。下町を見下ろす台地のはずれで、木々が茂り、閑静なところだが、渋沢が死んだ日の翌朝、この庭の茂みの中に、一人の怪漢がひそんでいるのが発見された。

怪漢は、十一月の夜寒の中を、一晩中、戸外で正坐していた。

「ここで、かげながらお通夜させていただきました」と。

ある鉄工所の経営者であった。不幸な生れで、渋沢が院長をしていた養育院で育てられたが、渋沢は多忙な体なのに、名前だけの院長でなく、養育院のために骨折り、子供たちをかわいがった。その男には、親代りに思える人だったという。

渋沢の死は、経済界だけでなく、ひろく市民たちに惜しまれた。

青山斎場には、約四万という会葬者がつめかけ、このため告別式を一時間くり上げてはじめたが、焼香の列をさばききれず、式を打切るまでに延々三時間半もかかるという有様であった。

天皇からは、「高ク志シテ朝ニ立チ、遠ク慮リテ野ニ下リ、経済ニハ規画最モ先ンジ……」
にはじまるかなり長い弔慰の御沙汰書ごさたがきを受けた。中に「社会人の模範で、内外の仰ぎ見るに値する人物」という意味のお言葉もある。

「……渋沢翁は、我実業界の元老、大御所と称せられたが、しかしその足跡より之を見れば、まさに我社会的の元老であり大御所であつた。それだけ翁の存在は我國の在来の偉人の類型を脱したものであつた。吾等は今日の時代、翁の如き人物のまた出でんことを望んでやまぬが、その後継者たり得る人は誰であらうか……」（東京日日新聞）

「……かならずしも短命といふべきでないに拘らず、しかもその長逝は、特に国家多難の今、痛惜の情に耐へないものである。思ふに、翁のごとく、真に一國民として、将また一市民として、その尽すべきを尽し、その果すべきを果し得るもの、世上幾人を算すべきであらうか……」（東京朝日新聞）

「……実業界隠退後に於ける渋沢子爵は、日本國民中の元老であり、社会的に日本公民中の第一の代表者であつた。凡そ公共的性質を有する重なる事業に於て、子爵が、直接又は間接に其指導者たり又は其援助者たらざるものはなかつた。九十余年の長き生涯の晩年を、最もよく社会公共の為に尽したる渋沢氏の如きは、他に全く其例を見ざる所にして、即ち日本國民中の長老とし、日本公民中の第一代表者として、一代の尊敬を集めた所以である……」（時事新報）

といった風に、各新聞は最大級の讃辭をつらねて、渋沢の生前の功績をたたえた。當時すでに「サラリーマン」という雑誌があつた。かなり尖鋭な論調の雑誌だが、そうした雑誌にも、

「大きな人物の落つるのは寂しい。大きくして暖みのある人格の世を辞するのは限りなき愛惜だ。渋沢翁は明らかにブルジョアジイの一人であるが、その故に翁を憎むものには不思議にない。大衆はブルジョアジイに対して根深い反感を持つが、翁に対してだけは除外例だ。無

産政党の人達でさへも『よき、をちさん』と考へてゐるものが多い……」

といった書出しの追悼文が見られた。

短歌雑誌「アララギ」には、同様な立場の人のものと思われる歌がのつた。

資本主義を罪惡視する我なれど

君が一代は尊く思はゆ

これらのほめ言葉に対し、草葉の陰で渋沢は、苦笑しながら「ノー、ノー！」と叫んでいそくな気がする。

本郷真砂町まごのいきな女性の住まいに、ときどき人力車で渋沢栄一に似た人物がやってくる。

他の明治の元勳たちが妾めかけを置くのなら、「どうせあいづらは、そういう人間なんだ」と問題にする気にもならぬが、それが渋沢では何となく勘弁できない。渋沢だけは、そんなことをするはずはないという気がする。もし渋沢なら、ひとつみんなで現場をつかまえて、冷やかしてやろうと、一高生たちが相談したエピソードが、大仏次郎『激流』に紹介されている。

一高生までも、渋沢を人格者として買いかぶっていた。

生前、渋沢は、

「わたしのしたことは、俯仰ふきやう天地に恥じない」

そういつてから首をすくめ、

「ただひとつだけ例外があるが」

と、弱々しくつけ足した。

日本女子大・東京女学館の創立に骨折り、一時は女子大の学長までつとめ、婦道を説いたりし